森林と人を活かす知恵
165

子どもの作業用手袋を考える
木工、工作に使う手袋の選び方

岐阜県立森林文化アカデミー　木工専攻　准教授●前野　健

今年の夏は学生達と一緒に、子ども達が参加する木工キャンプやワークショップをいくつか行いました。保育園では木の枝から動物の作品づくりを。小中学生を対象にしたプログラムでは、木のお皿や椅子(スツール)づくりをしました。これらのプログラムでは、ノコギリやナイフや彫刻刀、鉋(かんな)などの様々な種類の刃物を使います。

このような刃物を使った工作を行うとき、少し前までは手の怪我を防止するために、「軍手」を使うことが一般的でした。

○子ども用の軍手

近年、ワークウェアの量販店やアウトドアショップへ行くと、子ども用の軍手のラインナップの豊富さに驚かされます。サイズ展開を見てみると、可愛らしい幼児の手のひらの大きさで作られた物まで販売されています。

特に綿でできた軍手は熱に対しても強いため、キャンプで焚火をする際に重宝します。ここで注意が必要なのは、化繊でできた軍手の場合です。こちらは繊維が熱で溶けてしまうため、かえって火傷につながる恐れがあります。

手のひらに滑り止めが付いたものは、薪割り用に使えば、ナタやオノがすっぽ抜けるのを防ぐことができます。(道具を持つ手は、あえて「素手」にすることも有効ですね)


子ども用耐切創手袋(左上)、ゴム引き手袋(右上)、綿の軍手(下)

○子ども用の耐切創手袋

初めて子どもが刃物を使うときや、参加者が多数になるワークショップでは、耐切創性能を持った子ども用の手袋が安心感を与えてくれます。

耐切創手袋とは、切り裂きに強い繊維を使うことで、刃が触れても容易に切れない手袋のことです。

一方で、この手袋を使い続けていると、刃に触れることへの警戒心が薄れてしまうことが課題です。刃物慣れしていると思った子どもが、この手袋を外して作業をしたとたん、ナイフの刃を握って手を切ってしまうのです。

○作業性を上げる手袋

最近のワークショップで自分が好んで使っている手袋の1つが、手のひらがゴム引きで覆われている、薄手の作業用手袋です。先に紹介した軍手や耐切創の手袋は、使用している繊維やその機能上、生地が厚手になります。

そのため、夏場は暑くて子どもは外してしまったり、生地の厚みのために手に持った道具が動かし辛かったり、作業性の面でストレスになっている様子が多く見られました。


ゴム引きの手袋をはめて根気よく彫刻刀でお皿を彫る小学生

一方で、薄手のゴム引き手袋は手に道具を持つ感覚が素手に近く、道具も滑り辛くなるため、子ども達が不快感や作業性の悪さから、自ら手袋を外してしまうということも少なく感じます。

また、滑り止めの効いた手袋は、握る力をサポートしてくれるので手の疲労を軽減してくれます。

○機械作業での手袋は危険です!

一方で、電動工具を使う場合は、素手で作業を行うのが鉄則です。(例外はチェーンソー用グローブくらいです)

繊維が触れた瞬間に手が巻き込まれてしまい、大きなケガにつながる恐れがあります。

作業用の手袋に選択肢が増えた今だからこそ、用途に合わせた手袋を選んで、子ども達とのアクティビティを安全に楽しんで下さい。


重大事故を避けるために機械は必ず素手で使う

●詳しい内容を知りたい方は　TEL (0575) 35-2525　県立森林文化アカデミー まで